

明和町と『源氏物語』

『源氏物語』は、今から約1000年前の平安時代中期に紫式部によって書かれた長編小説です。

物語では、帝の皇子として生まれながら皇族を離れた主人公・光源氏を中心に、個性豊かな女性との恋愛がたくさん紹介されています。

物語にはおよそ450人の登場人物がいますが、明和町と関わり深い斎王という点では秋好中宮がいます。



「女房三十六歌仙図画帖」

に描かれた紫式部斎宮歴史博物館所蔵

<秋好中宮>

朱雀帝の時の斎王で、六条御息所の娘。斎王を務めた後、光源氏の養女となり冷泉帝と結婚し、光源氏の栄華を支えた人物の一人。

秋好中宮が斎王として斎宮に赴く際に、母の六条御息所が光源氏と別れて娘とともに斎宮へ同行する点や、帰京後に妃になる点から、実在した徽子女王（斎宮女御）とその娘の親子内親王をモデルにしたといわれています。

44帖「竹河」のあらすじ

夫の艶黒大將が若くして亡くなった後、子どもたちの将来を心配する玉璧が描かれる。友人関係である光源氏の息子・薫と蔵人少将は二人とも玉璧の娘・大君に思いを寄せるが、玉璧は大君を冷泉院と結婚させてしまう。失恋した蔵人少将は、正月の宴会で当時流行した歌謡の一種の催馬楽の「竹河」を謡いながら、悲しさのあまり上手に謡えない。薫も大君への思いの強さを自覚し残念がる。一方、大君は冷泉院から特別に可愛がられ過ぎて他の女御たちにねたまれてしまい、ストレスから病気になる。年月が過ぎ、順調に昇進する薫たちを見て、玉璧は自分の選択を後悔するのだった。



げんじものがたりしきしほりまげぶろうぶ
「源氏物語色紙貼交屏風」竹河
斎宮歴史博物館所蔵

44帖「竹河」は、明和町斎宮地区の「竹川」にゆかりがあります。

「竹河の 橋のつめなるや 橋のつめなるや 花園に はれ 花園に
我をば救てや 少女伴へて」

(竹河の橋のたもとにある花園に、私と少女と一緒に解き放っておくれ)

竹川には「花園」という小字があり、地元の人が大正の頃に建てた石碑が今も源氏物語との関係を伝えてくれています。



キーワード：文学、源氏物語、紫式部、竹川、花園